

二〇一五年度（中学）国語

（注意）

始まりのチャイムが鳴るまでに次の注意をよく読んでおきなさい。

- 一 始まりのチャイムが鳴るまで問題や解答用紙に手をふれてはいけません。
- 二 試験の始めと終わりは、チャイムで合図します。
- 三 試験時間は、八時三十五分～九時二十五分までの五十分間です。
- 四 始まりのチャイムが鳴ったら、解答用紙に受験番号、氏名を記入しなさい。
- 五 問題一冊（十三ページ）と解答用紙（一枚）です。
- 六 問題について質問してはいけません。
- 七 困ったこと（筆記用具を落としたときなど）があつたら、だまって手をあげなさい。
- 八 持ち物をかしたり、かりたりしてはいけません。
- 九 答えは、すべて、さだめられた解答欄の中に書きなさい。
- 十 答えは、すべて、さだめられた解答欄の中に書きなさい。
- 十一 終わりのチャイムが鳴ったら、すぐに筆記用具を置き、解答用紙をうらがえしにして問題の上に置きなさい。

一 次の文章は、映画監督の大林宣彦が書いたものである。これを読んで、後の問に答えなさい。

激しい戦争シーンというものを映画の中で描く時、かつては火薬を扱うプロフェッショナルの人たちが、画面の中に上手に火薬を仕込み、そしてボタンを「ジョン・押し」していくことで、爆弾が炸裂していった。その間を兵隊に扮した役者たちが駆け抜けていく。鍛えられた人たちがうまくタイミングを計って駆け抜けていくわけだが、人間がやることだから、必ず間違いがある。タイミングがほんの少しずれただけで、僕たちの仲間の多くの映画人たちが手や足を失い、時には命を失っていった。僕たちが映画館の中でポップコーンを食べたり、コカ・コーラを飲んだりしながら、「すごいなあ」と言っていて見る戦争シーンで、実は多くの人が傷ついたり、命を落したりしている。

ところが現代ではコンピュータグラフィックスのおかげでどんなことでも映像にすることができるようになった。像を作ることでもできる。どんなに壮絶な戦争シーンを描いたとしても、誰も怪我をしないし、命を失うこともなくなった。これは科学文明のおかげである。でも、人間にはとめどない好奇心というものがあるので、一度に五百人が死ぬ戦闘シーンを描くことができて、それを映画館に集まった観客が拍手喝采して喜んでくれたとすると、今度は一度に千人殺してみせよう、一万人が同時にぶつ飛んだらどうなるかと考え出す。つまりより残酷な方向へ向かっていってしまう。かつては到底描くことができなかった、弾丸が飛んできて体の中を突き抜けていく、あるいは目の前で手や足、首が飛ぶというシーンも作ることができるようになった。

人間には見たさというものもあるので、更に更に残酷なシーンが生まれていく。こうして生まれてきた映画を観客は見る。そのことの意味はあるだろう。それによって戦争というものの残酷さ、恐ろしさを知り、ああ、戦争はいけない、僕たちは戦争をやめようと考えさせる力になる。これは大切なことだが、同時に僕たちはもっとすごいシーンを見たいという気持を持っている。③ここが人間の難しさである。

かつてコンピュータグラフィックスによる表現を持たなかった時代に、こんな戦争映画があった。ロンドンの町

に来る日も来る日もドイツからロケット弾が飛んできて町中が爆破されていく。でも、この映画には爆破シーンほとんど出てこない。地下の暗い防空壕と呼ばれる穴の中に、ひと組の若い夫婦と生まれたばかりの赤ん坊がいる。防空壕の上の地上では、明るいい日が射し、爽やかな風が吹き、川が流れ、そこに緑の芝生があり、白いペンキ塗りのかわいい家がある。家の前の庭にはブランコがあり、もし戦争がなかったらこの庭で夫婦は赤ん坊を抱いて幸福に暮らすことができる。けれども今は戦時下、毎日毎日暗い闇の中で、僕たち観客も一緒に過ごさなければならぬ。ああ、もういやだ、はやくあの地上に出て緑の芝生の上で、日にあたって風に吹かれて暮らしたいなあと、観客である僕たちも願っている。映画の終りによく平和が訪れる。それまでずっと続いていた爆発音がふいにやむ。悪魔の哄笑のような破壊の音がふつとやむ。耳を澄ますと地上の小川のせせらぎや風のそよぐ音まで聞こえてくるような気がする。この静けさ。この穏やかさ。ああ平和がきた、と皆ほつとする。

その瞬間、それまでお母さんの胸に抱かれてやすやすと眠っていた赤ん坊が急に火がついたように激しく泣き出した。なぜかという、その赤ん坊は生まれた時から悪魔の笑い声のような戦争の爆撃音の中で、それを子守歌のように聴いてきたから、生まれて初めての平和の静けさの中では眠ることができない。静けさが恐ろしい。だから火がついたように泣き出してしまった。この場面を見て、まだ子供だった僕はほんとうに胸を打たれた。戦争って怖い、恐ろしいものだな。こんな可哀想な赤ん坊を生み出した戦争というものをやっつけてはいけな。このようにして、この映画の伝える反戦のシソウというものを僕はしっかりとめることができた。

現代のコンピュータグラフィックスで、首が飛ぶシーンや腕がもがれるシーンを見て、たしかに戦争はいけなと思う。しかし、それはほつたをピシッと叩かれて、「痛いだろう、だからやめなさい」と言われているのと同じようなものではないだろうか。昔の映画は赤ん坊の泣き声一つで戦争の恐ろしさを教えてくれた。一つの芸術として果たしてどちらが優れているのだろうと考えると、どうも昔のコンピュータがなかった時代の表現の方がはるかに優れた芸術表現だったのではないか。

ここで言えることは、芸術には欲望を抑制する力があるということである。人間の好奇心がボウソウし過ぎない

ように、そして好奇心によって生まれる文明、科学技術というものが行き過ぎて凶器にならないようにとどめる力、これが芸術の力あるいは役割ではないかと僕は思う。

大林宣彦「芸術」『いまを生きるための教室 今ここにいるということ』（角川文庫）所収）より

問一——線部①について。これは、観客たちのどのような様子を表現しているのだろうか。簡潔に説明しなさい。

問二——線部②について。これは、どのような人たちが「考え出す」というのか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 観客が喜んでくれる映画を作ろうと思う人たち。
イ 「すごいなあ」と思える作品を見たがる人たち。
ウ これまででない新しい映像を求め続ける人たち。
エ 戦争の恐ろしさを徹底的に示そうとする人たち。

問三 本文中の に、ひらがな五字のことはを補って、ふさわしい言い回し（慣用句）を完成させなさい。

問四——線部③について。この「人間の難しさ」をのりこえるために、何が必要だと筆者は考えているだろうか。本文の後半から五字以内のことはをぬき出しなさい。

問五 次の一文はもと本文中にあったものである。元にもどすのに最もふさわしい箇所をさがし、直後の五字をぬき出さない。

ドカーン、ドカーンという爆弾の音だけが聞こえてくる。

問六 線部④について。

(1) どんな赤ん坊について言っているのか。本文中から70字前後の部分をつぎ、最初と最後の五字をぬき出さない。

(2) この赤ん坊は、どういう点で「可哀想」なのだろうか。自分のことばで簡潔に説明しなさい。

問七 線部⑤について。本文で紹介している昔の映画は、どういう点で優れているのだろうか。現代の映画と対比しながら、自分のことばでくわしく説明しなさい。

問八 線部 a「ジュンジ」・b「シソウ」・c「ボウソウ」を、それぞれ漢字に直しなさい。

二 次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

* 桐朋小学校六年生の千代は、本が好きで、自分でも物語を書いていることを理由に、卒業生が全校児童の前で演じる劇の脚本を先生から任される。帰り道、仲良しの芳子さんと劇の内容について話し合っていると、政次さんという人に話しかけられる。「明るい希望に満ちあふれた劇がよい。君たちは、これから未来に向かって生きていくのだから」と言われた千代は、その三日後、未来の教室の話を書くことにしたと政次さんに話す。政次さんは千代に、航時機（タイムマシン）というものを発明したある博士が八十年後の世界に行く『八十年後の社会』（H・G・ウェルズ作 黒岩涙香訳）というイギリスの小説の話をしたが、千代は、自分が考えたのは六十六年後の教室の話だと言う。

「それはまた、ずいぶん半端な年数ではないか」

「はい。でも、ご一新が今から六十五年前ですから、六十六年前は、江戸時代です。明治の御世になって、世の中が変わりました。江戸時代には、汽車ありませんでした」

「なるほど、たしかに、君のいうとおり、明治維新のあとに社会は大きく変化した。江戸時代には汽車は走っていません。ラジオなんぞ影も形もなかった」

と、政次さんは、少し感心したような口ぶりでした。

「六十六年後といたら、一九九九年。二十世紀もいよいよ終わりに近づいた頃だ。どんな世の中になっているだろうね。わしは、とくに死んでいるだろうが」

「わたしは、六十六年後の未来が、どんな風になったらいいか、同じ組のみんなから考えを出してもらおうと思っています。そうすれば、お芝居もみんなで作ったという気持ちになれると思うんです」

② 千代の言葉に、政次さんはうなずきました。

千代が三度目に政次さんと顔を合わせた時、芳子さんはいませんでした。風邪をひいて学校を休んでいたのです。

る、そう良かった、と思いました。

そんな気持ちもこめて、千代は一生懸命脚本を作りました。物語は、政次さんが話してくれた『八十万年後の社会』がヒントになりました。時間旅行者が、六十六年後の世界からやってくるのですが、航時機が壊れてしまします。それを知ったハルという女の子が、直すのを手伝いました。時間旅行者は、そのお礼として、一日だけ、ハルに未来の世界を見せてあげることにしたのです。

そこは、同級生たちが語ったままの世界でした。時間旅行者は、ハルを小学校に連れていきます。学校は十五階もある高いビルディングで、階段ではなくエレベーターで移動します。六年生の教室を訪ねたハルは、未来の子どもたちのタイカクがよいことにびっくりでした。

ハルは、子どもたちから、未来の世界のことをいろいろ教えてもらいます。この未来の教室でのやりとりが劇の山場です。

千代は、脚本の中に、こんなせりふを書きました。

ハル「では、この時代では、勉強したい人は、だれでも上級の学校に進めるのですか？」

未来の少女「もちろんですとも。勉強したい人は、みんな女専に行けますし、女子でも、大学にだって行けますよ」ハル「まあ。なんてうらやましいこと！」

物語の最後は、もとの世界に帰る場面です。ハルが航時機に乗ると、見送りに来た子どもたちが、歌を歌ってくれました。『おぼろ月夜』という歌です。ハルの目から、涙がこぼれました。その歌は、ハルが学校でならった歌でした。六十六年後でも、同じ歌が歌われていたのです！

⑤ ああ、歴史はつながっているのだ、とハルは心の中でつぶやきます。そして、ハルも航時機の中で声を揃えて歌いました。やがて、子どもたちの声が小さくなって、ついには、まったく聞こえなくなりました。

千代の書いた脚本を、同級生たちはおもしろいといってくれました。そして、いよいよ、配役を決めることになりました。

先生は、せりふの多いハルは、小柄で物覚えのいい八重子さんに決めました。みんなはびっくりだと思いました。ハルとやらんでせりふが多いのは、時間旅行者で、男役です。だれもが、背が高くてもよくとおる芳子さんがテキヤクだと思いました。けれど先生は、時間旅行者の役は、級長の綾子さんがやりなさいと命じたのでした。

千代は、

「先生、時間旅行者は、芳子さんが、一番よいと思います」

といいました。多くの同級生がうなずきました。でも、先生は、怖い顔で千代を見ました。それでも、千代は懸命に、芳子さんがテキヤクであることを述べたのでした。ほかの子たちは、顔を見合わせるばかりで、何もいいません。結局、先生が考えを変えることはありませんでした。

その日、千代は芳子さんと一緒に帰りました。そしてまた、雑木林の切り株に座って、一息いれました。「しかたがないわ、千代さん。なんといっても、綾子さんのお家は、顔役なのだし」

と、がっかりしている千代を慰めたのは、当の芳子さんです。

その時、ふいに政次さんが現れました。

「おや、どうしたのかね？ またうかない顔をしているじゃないか」

「お芝居の配役が……」

千代は、学校のことを、ぼつりぼつりと政次さんに話しました。

「だから、わたしは、ふだんは先生の決めたことには、逆らわないのだけれど、どうしても芳子さんがテキヤクだと、いいなかったのです」

「なるほど。しかし、みんなは黙っていた。なぜだろう」

「先生の決めたことだから」

「では、先生は、絶対に間違わないと思うのかね」

千代も芳子さんも、なんと答えたらしいのかわかりませんでした。

「わしは、こんな風に思うんだ。千代さんは、芳子さんがテキヤクだと、いいなかったと、そういった。しかし、いいなかったのではなくて、自分として、^⑥いわなくてはならないことをいったのではないだろうか」

「いわなくてはならないこと？」

そういわれると、そんな風な気持ちもしてきました。千代は、自分が考えた物語を、政次さんに話してみたくありませんでした。

話し終わると、政次さんは、何度かうなずきました。

「なかなかよくできている。いいか、君たちは、^⑦どんな世の中になっても、^⑧未来を夢みる力を失ってはいけない」真剣な顔でそう語る政次さんに、千代も芳子さんも、真顔でうなずきました。それにしても、不思議な人です。昼間からぶらぶらしていて、仕事もしていないようですが、語る言葉は、ずっと千代の心に入り込んできて、しっかりと残るのです。いったい、この人はどういう人なのでしょう。

「あ、う、政次さんは、お仕事はなさっていらつしやらないのですか？」

千代は思いついてみました。

「仕事？ ああ、少し前に辞めた」

「まあ、じゃあ、ご隠居さんですね」

と、芳子さんがいました。

「辞めるつもりはなかったのだが、いわなくてはならないことをいったからだろう」

政次さんは、ぼつりとつぶやくようにいいました。

(濱野京子「未来の教室」による)

*尋常小学校：現在の小学校にあたる。当時は尋常小学校までが義務教育であった。卒業後は、高等小学校や高等女学校などへ進学できる。 ^①一新：明治維新のこと。 小半時：現在の約三十分間のこと。 女子医専・女専：それぞれ

れ女子医学専門学校・女子高等専門学校のこと。どちらも旧学校制度における女子の高等教育機関。

少し前に辞めた：この作品はフィクションだが、桐生政次は実在の人物。一九三三年八月十一日に、桐生悠々の筆名で信濃毎日新聞に「関東防空大演習を嗤ふ」という社説を書いて、空襲に備える軍の認識の甘さを指摘し、軍部を怒らせて新聞社の職を追われたことを指す。

問一 線部 a「ロジョウ」・b「アツ(い)」・c「ヒョウサツ」・d「タイカク」・e「テキヤク」を、それぞれ漢字に直しなさい。

問二 線部①について。政次さんは千代のどのようなところに感心したのだろうか。次の中からふさわしくないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 六十六年という数字が、半端なように見えて実はよく考えられた意味のある年数を示しているところ。
イ 今の生活以上に、世の中はますます便利になっていくだろうという明るい希望をいだいているところ。
ウ 現実を離れた空想ではなく、自分が実際に経験するかもしれない未来を思い描こうとしているところ。
エ たかだか数十年の期間を経ただけでも、世の中は大きく変わりうるということに気づいているところ。

問三 — 線部②について。政次さんが千代のことばにうなずいたのはなぜだろうか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 自分たちがむかえる未来について、千代がみんなで想像しようとしていることを良いことだと思ったから。
イ みんなで作る劇にするために、出しゃばりすぎないようにしている千代の気づかいを立派だと思ったから。
ウ 未来を描くという難しい脚本を書くのにみんなの知恵を借りようとする、千代のかしこさに感心したから。
エ 政次さんの助言にしたがって、脚本を未来を向いたものにしようと思死な千代の姿をけなげに感じたから。

問四 — 線部③「うかない顔」とはどのような顔のことか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 怒った顔 イ 晴れない顔 ウ 物足りない顔 エ 気の毒そうな顔

問五 — 線部④について。小学校卒業をひかえた千代の思いにふれながら、ここでの千代の気持ちを説明しなさい。

問六 を補うのに最もふさわしいことばを本文中から20字程度で探し、最初と最後の五字をぬき出しなさい。

問七 — 線部⑤について。この場面は、千代がどういう思いをこめて書いたものだろうか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 歴史に残る名曲というものは、何十年もの時をこえて人々に歌いつがれていくものなのだという思い。
イ どんな時代に生きたとしても、ふるさとに帰ることのできる喜びにまさるものはないのだという思い。
ウ 別世界のように進歩した未来でも、人々の心の奥にあるものは今の人々と変わらないのだという思い。
エ 夢のような未来に生きる人たちが、六十六年も前の時代の良さをわかってきているのだという思い。

問八 — 線部⑥について。千代のいったことはなぜ「いわなくてはならないこと」であったのか。最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア かげで別の人が傷つくことになってしまうから。
イ 自分の思ったことは口にせずにはいられないから。
ウ 立場が上の人は間違った判断をしてはいけないから。
エ 正しいとは思えないことがそのまま通ってしまうから。

問九 — 線部⑦について。

- (1) 政次さんはこれからどんな世の中になると考えているのか。わかりやすく説明しなさい。
(2) そのような世の中になることを比喩的に表現したことばを、本文中から六字でぬき出しなさい。

問十 — 線部⑧について。「未来を夢みる力を失ってはいけない」のはなぜだろうか。自分のことばで説明しなさい。

中学 国語

解答用紙

受験番号

氏 名

問一

--

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

(2)

--

問七

--

--

問八

a
b
c

二問一

a
b
い
c
d
e

問二

--

問三

--

問四

--

問五

--

問六

--

問七

--

問八

--

問九

--

(2)

--

問十

--